

コシアカツバメの秋期のねぐら

佐藤雅史

〒562-0041 大阪府箕面市桜5丁目18-20

繁殖期後期から秋の渡りの時期にかけて、ツバメ *Hirundo rustica* は河川敷のヨシ原などに大きなねぐらをつくる（たとえば、水野・岸1957, 風間・長谷川 1969, 須川 1982, 上田 1990）。一方、コシアカツバメ *H. daurica* については、国内での研究は進んでおらず、神奈川県で9月下旬から10月上旬にかけて40羽から50羽以上の集団が出来たり（横須賀高校定時制生物班 1963）、1960年代に大阪府寝屋川市で早朝に200羽ほどが電線にとまっていた例があったり（上田恵介 私信）、淀川の河川敷の草刈り跡で10月に数百羽が飛翔していたり（中谷 2000）、さらに広島県では、秋期に数千羽のコシアカツバメが電線にとまっているのがみられ、100羽単位の渡りの群れも観察されたり（日本野鳥の会広島県支部 1998）といったおもに秋の移動群らしい集団についての断片的な報告があるにすぎない。しかもこれらの観察のどれも、ねぐらについては言及しておらず、繁殖期後期から渡りの時期のコシアカツバメがどのような場所でねぐらを取るのかについて、これまでまったくわかっていなかった。1998年の秋、著者は奈良県において、コシアカツバメの集団ねぐらとねぐら入り行動を観察したので、以下に報告する。

ねぐら入りを観察したのは、奈良県曽爾村の曽爾高原であった。同高原はススキ草原を人為的に保全しており、そのため関西地方では珍しくホオアカ *Emberiza fucata* やコヨシキリ *Acrocephalus bistrigiceps* が繁殖できる環境が維持されている。著者と同行者は、1998年10月10日午後4時半過ぎに曽爾高原に到着したが、ススキ草原には入らず、すぐに亀山（標高843 m）近くまで登り、日没まで同所で望遠鏡と双眼鏡で鳥類などを観察し、午後6時直前に下の売店まで降りた。登りの途中で、上空を舞う明らかに100羽を越えるコシアカツバメの群れを発見した。観察した限りで、その群の中にほかのツバメ類を発見することはできなかった。

日没が近づき、このコシアカツバメたちが同高原のすり鉢状の斜面の中腹にあるススキ草原に降りはじめたので、同所がねぐらとなることが予想された。一部個体がススキに降りては来るが、ほかの個体が近くにやってくるとすぐに飛び立ち、それを何度もくり返すため、個体数をかぞえることは困難を極めたが、飛翔個体は少なくとも500~600羽にのぼっていた。やがて日没を迎え、コシアカツバメたちはススキ草原に少しずつ降りてきたが、数10cmの距離で数個体が同一のススキにとまるため、ススキが谷方向にかなりたわんでいた。そのあいだも、飛び立ったり、とまったりを頻繁にくり返していた。下山時には、かなり暗くなって

1999年9月16日 受理

キーワード：コシアカツバメ, 奈良県, ねぐら

きていたが、上空には飛翔個体がまだ残っており、完全なねぐら入りは、さらに暗くなってきたからであった。1日だけの観察であり、また個体の成幼の識別もできなかったため、この集団ねぐらが渡り途中の一時的なねぐらか、繁殖期後期の幼鳥を中心としたねぐらかは判断できなかった。

ヨーロッパでは、コシアカツバメは、繁殖後、ほかのツバメ科やアマツバメ類と混群をつくり、秋になる前には独り立ちした幼鳥（おそらくは第1回目の繁殖鳥が主体）が共同ねぐらをつくるという報告があり、スペインでの観察では、50羽と68羽の幼鳥が、時にツバメ、イワツバメとともにねぐらをとった例が報告されている（Cramp 1988）。また秋期の渡りに関しては、大群になることはなく、平均9.1羽の小群で渡るというトルコの例が知られている。日本ではこうした他種との共同ねぐらの例や、小群での移動は知られていないが、前述の観察例や今回の観察などから、コシアカツバメは秋の渡りの時期に、ススキ草原などでねぐらを取り、次第に集団の規模を大きくしながら、西南日本を通過していくことが示唆される。今後、観察例が増えれば、コシアカツバメの移動やねぐらの様子が、より明らかになると期待される。

大阪市立自然史博物館のメーリングリスト（OMNH）を通じて観察記録を教えて頂いた上田恵介、中谷憲一の両氏、文献等をご教示いただいた和田岳氏に感謝の意を表する。また上田恵介氏には原稿をみていただき、文献を教えていただいた。深謝申し上げる。

引用文献

- Cramp, S. 1988. Birds of Europe, the Middle East and North Africa Vol.5. pp. 281-282. Oxford Univ. Press, Oxford.
- 風間辰夫・長谷川和正. 1969. ツバメの集団ねぐらに対する新知見. 鳥 19: 8-16.
- 水野壽彦・岸博幸. 1957. 葦原における燕集団の継続観察. 野鳥 22: 5-12.
- 中谷憲一. 2000. 煙に集まるコシアカツバメ. Nature Study 46(1): 7.
- 日本野鳥の会広島県支部. 1998. ひろしま野鳥図鑑. p. 160. 中国新聞社, 広島市.
- 須川恒. 1982. 宇治川河川敷のツバメ類の集団場とその保護について. 関西自然保護機構会報 8: 25-30.
- 上田恵介. 1990. 鳥はなぜ集まる? 東京化学同人, 東京.
- 横須賀高校定時制生物班. 1963(1996). 神奈川県下におけるコシアカツバメについて(再録: Binos 3: 69-80)

Observation of roosting Red-rumped Swallows

Masafumi Sato

5-18-20 Sakura, Mino-o, Osaka 562-0041, Japan

Despite the fact that there is a lot of information on the roosting of the Barn Swallow *Hirundo rustica*, nothing has been published on the roosting of Red-rumped Swallows *H. daurica* in Japan. The aim of this report is to provide details of observations of the roosting of the Red-rumped Swallow, hoping that it may increase interest in the behavior of this species.

On the 10 October 1998, hundreds of whirling Red-rumped Swallows were observed at the Soni Heights in Nara, which then went into a field of Japanese Pampas Grass on a slope of this highland area. From their behavior this field was assumed to be their roost but as there was only one day of observation, the age of individuals, the composition of the group, and the permanence of the roost were not ascertained. The number of Red-rumped Swallows observed was estimated at last at about 500 to 600 and it was assumed that there were no other swallow species in the flock.

Key words: Nara prefecture, Red-rumped Swallows, roost